対岸を包むように湾曲する川の外周と背後の深い山々

四万十町 町内ぶら～り散策

井崎（いさき）①

河岸が長く、奥行きもあり広大

井崎地区は、対岸にある半島型の広瀬地区をぐるっと包んだような位置にある。湾曲する四万十川の内側が広瀬で、外側が井崎。つまり円の外周になる井崎は距離も長い。また奥行きもあり広大で、北は小野と、東は大井川と、南は旧中村、西は西土佐と隣接している。地区は保喜、中組、実弘、井崎谷、相後、柳瀬の六つの組に分かれている。地区全体の産土神は八坂神社だが、合祀されている河内神社も同格とされている。また、保喜、井崎谷、相後、柳瀬にもそれぞれに神社があり、各々大切に祀られている。

同格で祀られている八坂神社と河内神社

地名は古代の漁網の原料名から？

前号では「広瀬遺跡で大量に出土した石錘（せきすい）から、その時代にはすでに網を使って魚を獲っていたと考えられている」と書いた。さてこの網について。当時の網の原料としてアオイ科の繊維植物「イチビ」が使われていたとされ、この「イチビ」のことを方言で「イサキ」と言ったらしい。これが地名の由来ではないかという説が「ふるさとの地名（十和村教育委員会・昭和57年刊行）」に記されている。イチビは古代に中国から伝来し、繊維植物として利用されていたことは広く知られているが、縄文期に、これほどの山奥にまでその技術が伝わっていたことに驚く。

地検帳の謎

江戸期の地検帳によると井崎村は「小野内井崎村」とあり、小野村を構成する一村であった。ところが同じ地検帳に、四万十川の対岸（西側）にある広瀬村は、井崎村の東側に位置する大井川村を構成する一村と記されているようだ。それだと井崎村を跨いだ形になる。この謎を解く鍵になるかもしれないことを聞いた。

大井川の最南部に八木という地区がある。ここから四万十川にかかる広井大橋付近に向かって流れる井崎川に沿って井崎谷集落が展開されている。実はこの井崎谷、元は大井川の一部だったらしく、井崎地区となったのは戦後になってからだという。地区の翁は言う。「大井川だった昔の名残だろうか、井崎地区となってからも井崎谷の人が谷を下って来る時は、井崎へ行くと言っていた」と。井崎谷が一本の線となり、大井川と広瀬を繋げていたということなのだろうか。

さて、この井崎川が四万十川に合流する辺りには小学校があった。明治8年、十川小学校の前身である大野小学校の分校として開校し、その後十川第三小学校として独立。昭和32年には井崎小学校と改称。さらにその2年後広瀬に移転し広井小学校となった。（次回に続く）

町のうごき

（2月28日）	人　口	前月比
男	7,166	-25
女	7,705	-19
計	14,871	-44
世帯数	7,924	-6

	出生	死亡	転入	転出
男	1	19	8	15
女	2	16	9	14
計	3	35	17	29

（2月中の届出）

窪川地域 10,613人　大正地域 2,039人　十和地域 2,219人

四万十町通信 2025.4月号 Vol.229（毎月10日発行）
●発行／四万十町企画課　●印刷／弘文印刷
〒786-8501　高知県高岡郡四万十町琴平町16-17　(0880) 22-3124　FAX (0880) 22-3123

UD FONT by MORISAWA　本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。